
祭囃子

axia000

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

祭囃子

【Nコード】

N9813U

【作者名】

axia000

【あらすじ】

逃げているひとりの少女。その姿は誰にも見えない。

夏祭りを通り過ぎ、やがて墓場へ。その火葬場の下に広がる空間でひとりの青年と出会う。

地下深くに進んでいくふたりが見たものとは・・・

前編（前書き）

ホラーのつもりで書いたではありませんが、あえていうならホラーかな、と。

この主人公の少女が何者なのかは、自分では分かりません。彼女がどういった存在なのか説明できる方、もしいたらご教授ください。

前編

森を切り開いた広場から、墓場へと登る坂道。囃子の声と、逢い引きの恋人たち。追い抜いて息咳き走る。だれも私のことは見えていないのに。

森と林の向こうに祭りが消える。明かりのない墓場に来る。

祭りを見つめながら、駆け上がる。

目の前に背の低い石造りの建物。昔の火葬場だろう。錆び付いた扉に手をかけると開く。入って、扉を閉じ、もたれかかる。息が激しい。中には、明かりが点っている。そして冷たい。人工の冷たさ。保冷庫のようだ。

低く伸びる階段が下へ向かっている。その先から明かり。そして生臭さ。降りていく。引き返せないから。前にも後ろにも道はないような気がする。

崩れそうな土の階段を降りた先に、広い空間。奥まで長い。そして立ち並んでいる銀色のケースのようなもの。ちょうど私くらいの高さで、長いケースが、2列に並び、それが奥まで何個も、何個も並んでいる。

そして生臭さの正体。天井から鉤で吊るしてある人間の死体。ケースの前に並んで何十体もぶら下がって、揺れている。

生皮を剥がれていたり、手足を切断されていたり、様々な死体。赤みが牛肉のようであったり、筋繊維がむき出しにされていたり、顔はほとんど生前の形をとどめていなかったり。目を見開いている、凍りついた恐怖と苦痛を止めたままに。

現実味のない光景。怖くはない。保健室の人体模型はあんなに嫌

いだったのに、ここにあるのはむしろ全てが作り物のようだ。これが現実だと心に浸透してしまえば、私は発狂してしまうかもしれない。一種の心の防御作用なのだろうか。

降りていくと、ひとりの青年が立っていた。少年のようでもある。年齢が見えない。私の見方一つで何歳にでも見えそうなオトコノコだ。

降りていくと、私を見る。透き通るような青い瞳。もしくは深い闇を持つ紺碧の瞳だ。

「君みたいな女の子が、どうしてこんなところにいるの。ここが平気？」

私を振り返って、話しかけてくる少年。声を聞くと、彼は女の子かもしれないような気もしてくる。分からない。その声に問われると、急に怖くなってくる。ここには居ない方がいいのだろうか。でも、去りがたい。同じ質問を彼に返す。

「あなたは？　ここで、何をしているの？」

「ここにいる人たちを殺した人。それを探している」

ぶら下がった死体をぬって歩きながら青年は言う。私も後について歩く。それが当たり前のような気がして、彼もそれを知っているかのように。

「探して、どうするの。これは全部人殺しの仕業なの」

「僕は……ふうん……」

彼の声が幼くなる。立ち止まって、自分の両手をまじまじと見つめ、面白そうに私を見上げる。

「君の目には僕はこんな風に映るのか。興味深いね……おっと」

死体のひとつに少年が触れてしまう。と、その死体が呻いた。私は凍りつく。もう動いていない。けれど確かに、そこにぶら下がっている、皮を剥がれ、両足をもがれた死体のひとつが、喋ったのだ。「ここには怨の気が増えすぎている。この人たちの無念を晴らした

い。怒の気は人の心を引きずり込もうとする。……君は感じないみたいだけど」

いまや少年になった彼が言う。低い声。怒りの籠っているかのようで、そうではなく、なんの感情も現してはないようにも聞こえる声。

「声が聞こえるの？ 死んだ人たちの声が」

「聴こうとすればできる。それを聴かないと犯人は捕まえられないだけ」

不意に、銀色のケースに手をかけ、そこにある取っ手を引く。横に長い蓋が下を開き、それを引き出すと、そこにあるのはまた人間の死体だった。

青年が手を触れると、その死体が苦しそうに呻いて、青年に何かを訴えた。青年はそれに耳を傾け、そつと手を離す。また動かなくなる死体。青年は引き出しをそのままにまた奥へと歩き出した。

「僕が触れているときだけ生き返る。でも、惨いよね。あんな悲惨な姿のままで生き返ってもそれは拷問だ」

やがて奥に広い空間が広がる。天然の洞窟のような広場。明かりはどこにもない。先へ進むにつれ、世界が闇に消えていく。

「いたよ……」

まだ明かりが遠くから辛うじて届いているほどの奥まで歩いて、青年は立ち止まる。だれか、いる。なにか、在る。でもそれは見えない。そこに確かにいると感じるだけの存在だった。

後編

空気が唸る。その何かに導かれている。

洞窟に反響して満ちる無数の唸り声。地響きのように洞窟を揺らし、水のように重く空間に満ちる。

唸り声が、耳から、体の中にまで染みこんでくる。悲鳴を上げて蹲る。耳から、脳に滲んで、体をじわじわと犯す。全身をしわがれた手で愛撫されているかのようだった。

「あいつが怨の気の全てを集めている。自分で殺した人たちの怨念が渦を巻いているんだ」

青年が私の肩を抱いて背中をさする。気分がすうっと楽になる。彼の手から怨念が吸い上げられているかのよう。

「あいつは僕が倒す。君はここで見ていて」

青年が私からはなれ、数歩前に出る。

寒い。全身を犯す恐怖は消えたけれど、体は温度をなくして凍えきっている。

青年の姿が震えて見える。分かる。彼は怒っている。怒りに震える肩が、腰を屈めたたち姿勢が、釣りあがった瞳が、全身で怒りを表し、奥にいる何かに向けて放たれている。

空間を満たす声がそれに呼応するかのようになくなる。闇の中、黒い影が無数に宙を走る。私には分かった。それは強さを増した怨の気が実体化した姿だった。

けれど私には向かってこない。全て、青年の中に吸い込まれている。なにかが青年を攻撃しているのではない。自分で吸収している。それが私には何故か分かった。

青年の姿が霞む。そこに、獣の姿が現れた。

狼の姿をして、2本足で経つ人狼。低い天井に届くほどの巨体。青年と同じ姿で唸りを上げ、敵を見ている。

「飲み込まれないで……！ 君が僕をどう見るかは、君次第だ……！」

人狼のほうから声がする。口を動かさずに喋っている。そこにいるのは青年なのだ。そして私はいま彼に、狼を見ている。

「僕の姿は……こうであってはいけないはずだ……」

狼の唸りに、青年の声が吞まれていく。増え続ける闇。闇を吸収して怒りを蓄積していく人狼……青年。

怖い。私は自分の肩を抱いた。青年は負けている。負けたらどうなるの？ そして私は？

全てが未知の世界で、なにひとつ理性で片付けられはしない。4方を壁に囲まれたかのような息苦しさ。そしてその壁は迫り、私を押しつぶそうとしている。

心が溢れる。疑問と恐怖の板ばさみ。どうしてこんなに怖いのか。それにどうして私は、これまで怖いと思えなかったのか。

私は誰なの？ そして、どうしてそれを、これまでの一生で一度も考えたことがなかったのか……

「きみは」

不意の青年の声。

眼を開くと、闇が消えている。人狼の姿もない。いるのは、少年になった彼と、その前に浮かぶ小さなひとつの闇。

その闇は、いつのまにか小さな女の子の姿になっていた。熊の人形を抱き、落ち窪み、くまのある黒い瞳が青年をじっと見つめている。

「そんな……君まで犠牲になっていたなんて」

青年の手がそつと少女の頬に触れる。少女が涙を流す。少女は喉の奥から枯れた声をあげると、また黒い影となって少年の中に吸い込まれていった。

立ち尽くす少年。悲しげに潤んだ瞳が、私を見る。

「ありがとう。この姿なら、あいつを消せる」

振り返り、ずっと洞窟の奥を指差す。それで終わりだった。嵐はもう起こらない。怨念が私を犯すこともない。そこは、ただの洞窟だった。少年は、再び青年に戻っていた。さつきよりも、少しだけ若い青年に。

いつの間にか、外に出ている。あれつと辺りを見回しても、あの火葬場はない。そこにあつたはずの石造りの建物は消えている。なにもない草っ原になっていた。

雛子の音が遠くから聞こえる。まだ祭りも中盤だ。今から戻れば神輿にも間に合う。あの少女の顔を思い出すと、無性に綿飴が食べたくなった。

「さつきの場所は……」

「全部消したよ」

青年の声。松の木に寄りかかつて私を見ている。柔らかな微笑み。その後ろから、祭りの薄明かり。

「生き返らせることはできない。だから、消した。せめて全部なかつたことにした。あそこにいた殺された人たちのことはもう誰も覚えていない。……そのほうが悲しいかもしれないけれど」

青年は目を細め、意味ありげな瞳で私を見た。

「忘れなければやっていけないことのほうが、世の中には多いからね」

「あなたは、誰なの」

「僕が誰かより、君は君自身が誰なのかを考えたほうが良くないかい」

その言葉に、深く沈む。私は、誰。ずっと考えてこなかった。たぶん、逃げてきた。ここへ逃げてきたのも、何かから逃げていたからだ。それが何だったのかすらもう思い出せない。そうやって生きていたから、こんな簡単な疑問ももう頭に浮かぶことすらなかった。

けれど、違う。私が落ち込んだ理由は。青年が応えてくれなかったら。私の、誰なの、という問いかけに。

私は、彼のことを知りたい。私は、彼のことを知っている。たぶん、知っているというよりも深く、知っている。恋焦がれるくらいに。けれど彼が私のことを知っているのかどうか、それは分からない。

「いこうか」

彼が言う。下のほう、祭りを見つめながら。

いこうか。どういう意味だろう。共に、という意味でいいのだろうか。ふっと手を伸ばしそうになる。彼は首を横に振る。

「君は、君の道を。僕は僕の世界を」

青年が木から身を放す。それだけでもう見えなくなる。けれど、そこにいる。私のお別れのひと言を待っていてくれる。

「……元気でね……」

やっと絞り出した声。青年の「君も」という声が風に紛れる。

私が登ってきた道を見下ろす。長い長い下り坂。途中で右に折れれば祭り。ずっと下っていくと深い闇。

歩き出す。すすすつと足を進め、ちよつとの間だけ祭りを見つめる。親の手を引く子供。浴衣姿の老夫婦。友達と出店であそぶ少女たち、少女たち。みんな楽しそうだ。私とは無縁の楽しさだ。

坂を下り、闇に足を踏み込む。私は、この闇から逃げてきた。この闇のようなものから、ずっとずっと逃げてきた。

一度だけ、自分から足を入れてみようと思う。先になにかあるのか。それを見てからまた踏み入れるかどうかを決める。自分で選んだ道。もう後戻りはできない。

あの青年に会いたかった。けれど予感がした。もう、2度とは会えない。けれども進むしかない。それが、望んだ道だから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9813u/>

祭囃子

2011年7月22日03時41分発行